



Title	山林寺院の立地について：飛鳥・奈良時代における大和国およびその周辺の事例研究
Author(s)	奥村，茂輝
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 701-715
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105082
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

山林寺院の立地について

—飛鳥・奈良時代における大和国およびその周辺の事例研究—

奥村 茂輝

はじめに

本稿では山林寺院の立地に関する幾つかの事例をとりあげ、それらに共通する地理的特徴とその場所が選地された背景について考察したい。対象とする地域は大和国を中心とした畿内地域で、時代は飛鳥時代から奈良時代末までである。なお筆者は山林寺院を主題とした三部構成程度の論考を予定しており、本稿はそのうちの一部である。そのため山林寺院研究全般についての研究史の紹介は、今後の論文にておこなう。以下では本稿に直接関わる先行研究を中心に取り上げることをご容赦頂きたい。

1. 山林寺院の定義付け

国土の73パーセントを山地（丘陵地を含める）が占める日本では、仏教が伝来した6世紀末から現代まで、絶えず平地と山地において寺院が建立され営まれてきた。丘陵地を含む山地において建造された寺院を我々は山寺や山林寺院、ないしは山岳寺院と呼ぶが、これについての研究史は古く、考古学のみならず文献史、建築史、美術史、仏教史といった様々な分野であつかわれてきた。またその研究視点は多彩で、本稿が視座とする立地論だけではなく、山林寺院の機能や建立の目的、経済基盤など多岐にわたる論点で論じられてきている。

山中に位置する寺院を山寺と呼ぶのは古来からの呼称法で、『日本書紀』『続日本紀』といった国史だけでなく仏教説話集である『日本霊異記』や奈良時代初期の詩集である『懷風藻』などにもみられる。次章で扱う崇福寺が『万葉集』で「志賀山寺」、『続日本紀』で「志我山寺」と記されたことなどは顕著な例である。また各地の寺院の発掘調査で「山寺」と墨書・ヘラ書きされた土器や瓦も数多く出土している。以上のことから山寺という語は古代における一般的な呼称であったといえるだろう。つぎに山林寺院という語は『続日本紀』宝亀元年（770）十月丙辰（28日）条にみられる。続紀に書かれた内容は、山林寺院において僧が私的に集まって読経・悔過することを禁じた勅についてである。このことから山林寺院という語が古代において一般的な呼称であったことが読み取れる。いっぽう山岳寺院といった語は管見の限り、六

国史・律令・万葉集・正倉院文書など古代の史料にはみられない。なお平安時代になると山岳という表現は見られるものの（大同元年6月太政官符『類聚三代格』巻16など）、山岳寺院という語はやはりみられない。少なくとも、古代において山岳寺院という概念は無かったようで、この語は民俗学や建築史で用いられた学術用語といえそうだ。

とはいえ、山寺や山林寺院、山岳寺院という呼称については個々の論者により概念規定が異なり、衆目の一致をみているわけではない。たとえば斎藤忠は、山寺という語については、中国や日本で古来からあった呼称としつつも、山林寺院という語が国史にみられる表現であること、林が僧尼の善行にふさわしい幽棲な境地を意味すること、といった理由から山林寺院の語を用いている（斎藤1997）。また近江昌司は山岳寺院とは比叡山や高野山などの平安時代以降の密教系寺院を指すもので、飛鳥・奈良時代の山中に立地する寺院には、山林寺院の語をあてるほうがふさわしいとする（近江1998）。なお、藺田香融の「古代における山林修行とその意義」（藺田1957）は、飛鳥・奈良時代における僧尼の山林修行について先鞭をつけた記念碑的論考であるが、藺田は論中で山林修行と語を用いるものの、山林寺院という語は用いず、比蘇山寺といった固有名称のみを使っている。

山寺・山林寺院・山岳寺院に対する語義については各論者の論考を参照頂くとして、本稿では山中および山麓に立地する寺院を現今の趨勢を鑑みて山林寺院と呼称する。ただし、この場合前提として必要なのは、なにをもって山林寺院と概念規定するかどうか。山村研究の第一人者である民俗学者の千葉徳爾によれば、古来日本人にとって「ヤマ」の意味するところは二通りあるという。一つは山岳・丘陵としての「ヤマ」で、これは見るからに平地よりも比高が著しい場所を指す。もう一つは樹木の群生する山林地で、「関東平野・濃尾平野などの低平な地帯では、土地の高低とは無関係に林地を指す」という。元来日本には二つの土地概念をあわせて「ヤマ」と称し、これに漢字の「山」をあてていたらしい（千葉1993）。これと似た概念が東北地方にあったこと、すなわち山峰のことをモリと呼んでいたことは和歌森太郎も説いている（和歌森1975）。千葉や和歌森が説く概念は主として東日本のものであり、一概に筆者が扱う古代の畿内における山の概念と等し並みに扱うことはできないという見方もあるだろう。しかし、比叡山や高野山といった山岳の中に位置する寺院を山寺と呼ぶのはまだ理解できるが、墨書土器や文字瓦からみて、山と里の中間地点に位置する寺院を山寺と呼んでいた例があることから、和歌森や千葉が説くような山に対する土地認識が古代の畿内にあったと考えることはじゅうぶん可能だ。最近の研究動向、特に古代を中心として、山林寺院という語が多く使われるのは、『続日本紀』に記されたという理由だけではなく、上記のような里に近接した山麓（山林）の寺院を含めて山林寺院とする認識があるためだといえよう。

では山林寺院をどのように定義付ければいだろうか。その際に不可欠なのは、山寺と捉えた古代人の認識と、山林寺院と呼ぶ現代人の認識がなるべく乖離しないような概念規定である。

古代の人達はその寺を山寺と捉えたのは、確実に平地寺院ではみられない場所に立地しているからである。また選地する側の意識としても、人が活動する俗界から一定の距離を置いた場所に寺域を定めて、聖界を形作ることを第一目的としたことはあきらかである。以上のことから考えると、山寺＝山林寺院とは人が居住し耕作や交易などの諸活動をおこなう場所とは離れた場所に位置するものを指すとみるべきである。このことはすでに大西貴夫が説いており、大西は都城・集落・墓域以外の場所に山林寺院が営まれたと指摘している（大西 2008）。以下では大西の指摘を受けつつ、山林寺院の立地に関するやや具体的な条件を考えてみたい。

あたりまえのことだが俗界から離れた場所に聖界を設定することを目的とした山林寺院は、条坊に囲まれた都城や、田畠が広がっていた条里制下の耕作地、もしくは耕作者の居住地である里には立地しない。宅地が班給される京城と、条里制によって班田が広がる耕作域・里は俗界であり、ここに山林寺院が営まれることはないのである。このように考えれば律令制下の土地概念でいうところの、条坊制や条里制の枠外、すなわち養老令の雑令（雑令 9 国内条）が規定する山川藪沢のなかでも、特に山に営まれた寺院を山林寺院と定義づけることができるだろう。しかし例えば次章であげる横井廃寺のように、7 世紀前半に建立された寺院でも山寺と捉えられていた事実があることから、雑令が説く土地概念が未成立の段階でも山寺が存在したのは事実である。とはいえ、7 世段階であれ 8 世紀段階であれ、基本的に古代の感覚において、俗界である平地と聖界である山の土地概念が、律令の設定により大きく変化するとは到底考えられない。したがって、居住域および耕作域とはかけ離れた山地に立地する寺院を山林寺院と呼ぶ概念は有効だといえる。筆者は、山林寺院とは条里・条坊制の枠外で、丘陵地もしくは山に築かれたものを指すと定義したい。またこの概念に加えて、大西が説くように山地のなかでも墓地だけは山林寺院の立地からは外れる。河内の生駒山西麓や摂津の北摂山系に 7・8 世紀代の山林寺院が皆無であるのはその好例である。

2. 山林寺院の立地に関する事例

前章において 7・8 世紀における山林寺院の立地概念について私見を提示した。以下では、山林寺院の立地に関する一つの類型をいくつかの事例を挙げて説いていきたい。対象とするのは 7・8 世紀の大和地方と近江地方の寺院である。以下で個別寺院の検討に移るが、その前に考古学の分野から山林寺院の空間構成を含めた立地について扱った上原真人と久保智康の研究について概観しておきたい。

上原真人は寺院の伽藍配置を金堂・塔で構成される仏地と、講堂・僧房・食堂で構成される僧地に分け、仏地と僧地の伽藍における分化が平地寺院と山林寺院の双方でみられることを論じた（上原 1986）。さらに上原は古代の山林寺院においてその所用瓦に平地寺院と同範関係が

認められるのは、その山林寺院が平地寺院所属の僧尼が修行・善行する場所であったからだとする（上原 2022）。これと同様の解釈は、須田勉も関東地方における古代寺院の例をあげて説いている（須田 2002）。いっぽう、久保智康は上原が説いた僧地と仏地について各時代・地域の山林寺院で検証した結果、必ずしも両者の配置に区別がみられるわけではないと主張する（久保 2001）。久保は特に平安時代以降の事例に触れ、仏地である金堂と僧地である講堂を立地的に区別することはできないという。さらに、仏地的堂舎が寺域の最奥に置かれ次第にその前方（下方）に広がっていくという方向性が時間軸のなかでみられるという。

上原論文は飛鳥・奈良時代における事例をもとにし、久保論文は主として平安時代以降の事例をもとにしており、その間には平安遷都と真言・天台密教の成立という山林寺院造営における大きな転換点があることを認識すべきである。すなわち両者の検討対象には、山林寺院の経営実態に時期的な差異があることを念頭に置くべきだろう。上原が説いた山林寺院と平地寺院の関係は、都城もしくは条里制下の範囲内に平地寺院が造営された時代のもので、山林寺院はその主たる存立基盤を平地寺院に依っていた。いっぽう久保が主として説くのは都城における寺院造営が規制され比叡山・高野山といった山中に造営された寺院が単独で存在した時代である。両者の認識差は時期差ととらえたい。ただし、上原の論考には本稿で主題とする立地要件について鍵となる解釈がある。それは、自然地理的な条件は山林寺院の立地に大きな要因とはならなかったという解釈で、これの是非について考えるのが本稿の目的である。

（1）毛原廃寺（図1）

まず本稿で扱う典型的な立地を示す寺院として毛原廃寺を取り上げたい。毛原廃寺は大和高原を南西から北東に流れる笠間川の沿岸に位置する。笠間川流域は大和盆地から伊賀へ抜けるルートの一つで、寺から川沿いに東行すれば名張川と合流し伊賀に至る。寺の調査の歴史は古く、その嚆矢は関野貞の奈良県技師時代にまで遡る。関野は現存する礎石位置の実測作業をおこなったうえで、建物規模と伽藍配置を復元し、さらに出土瓦から同寺の建立年代と廃絶年代について言及した（関野 1902）。建築史の分野では関野の毛原廃寺における調査は、建物が廃絶し礎石のみが残存する廃寺についておこなわれた我が国初の調査と評価されている。その後大正年間の西崎辰之助による調査（西崎 1918）、昭和初めの上田三平による調査（上田 1928）などを経て、直近では令和 3・4 年の奈良県立橿原考古学研究所による調査（山添村教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所 2024）に至るまで調査実績が積み重ねられている。

毛原廃寺の創建年代については、出土瓦から森川桜男・山田猛により 8 世紀中頃の早い段階とする説（森川・山田 1980）と、松田真一・近江俊秀による天平年間始めとする説（松田・近江 1991）がある。最近では毛原廃寺出土軒丸瓦 KA（平城宮式 6282 系）と KB（平城宮式 6304 系）、軒平瓦 KC（平城宮式 6689 系）の年代観から、その創建時期を天平元年頃とする

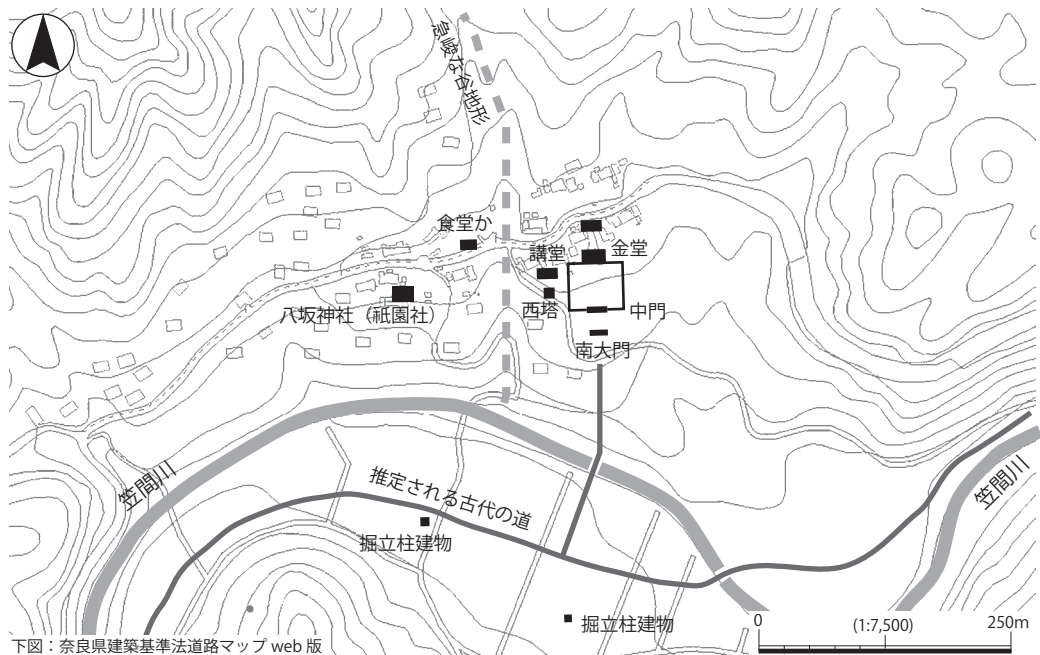


図1 毛原廃寺の立地

岡田雅彦の意見がある（山添村教育委員会・奈良大学文学部文化財学科 2020）。軒丸瓦 KB と軒平瓦 KC を天平年間初頭に置く見解は妥当だろう。ただし残る軒丸瓦 KA（平城宮式 6282 系）の文様は当初、恭仁宮所用軒丸瓦に採用されたもので、恭仁宮以外に供給されるのは平城遷都以降であることから（奥村 2011）、これを天平年間初頭まで遡らせるのは難しい。

つぎに寺の立地についてみてみよう。毛原廃寺の南大門から南は傾斜地となっており、そこに笠間川が西から東へ向けて流れている。笠間川の南には平坦地が広がっており、周辺では掘立柱建物が複数検出されていることから、この平坦地に奈良時代の古道が川と並行して走っていたと推測される。おそらく古道から北に向けて川を渡り南大門へと至る道程が寺域に向かうルートとみられる。ここで留意したいのは寺域の南限が笠間川であり、集落域（俗界）から寺域へと向かうには川を渡る必要があったことである。また中心伽藍の西側には急峻な谷地形が南北に走っており、これが寺域の西限線であった可能性が考えられる。ただし、この谷地形よりも西側に食堂跡と推測されている礎石建物が検出されていることから、寺域の西限は谷地形よりもさらに西に広がる可能性がある。なお、食堂推定建物よりもさらに西に八坂神社（祇園社）があるが、このあたりが寺域の西限となった可能性もある。なぜなら、中世以降の事例だが、寺域の境界線に八坂神社を置く事例が畿内で多くみられるためである（奥村・合田 2023）。つぎに毛原廃寺の北側には、北東の高塚山から派生する急峻な山並みが広がる。以上のように毛原廃寺は笠間川を南限とし、北限を山地としていた。さらに寺域へ入るには、笠間川の南に走

る古道から北へ川を渡る道程を経たことがわかる。寺域の南限が川で区切られ、寺域への道程は川を渡る必要があること、そして寺域の北限は急峻な山であること、以下で取り上げる山林寺院の立地は毛原廃寺でみられる地形的特徴を同様に有している。

(2) 横井廃寺 (図2)

横井廃寺の発見は明治28年に金銅製の観音菩薩像をはじめ鏡、皇朝銭などが発見されたのを高橋健自が報告したことに始まる(高橋1906)。高橋は『尊卑分脈』『拾芥抄』を引用し、同寺が藤原の地に位置することから、中臣寺(藤原寺)であることを論じた。その後、保井芳太郎(保井1928・1932)、石田茂作(石田1936)、岩井孝次(岩井1937)らによる採集瓦の紹介があったが、なかでも重要なのは石田茂作の論考である。石田は当寺を初めて横井廃寺と称し、その伽藍配置について推定した。石田によると横井廃寺は塔・金堂・講堂が直線上に並び東向きの四天王式伽藍配置で、その創建時期は採集瓦から飛鳥時代に求められるという。石田が呼称した横井廃寺の名称、伽藍配置、創建時期はその後定説となるが、伽藍配置については筆者は、以下で述べる理由から北面する法隆寺式伽藍配置と考える。また横井廃寺中臣寺説は石田説により否定されたが、その後福山敏男により完全に否定された(福山1948)。

直近の研究で横井廃寺について論じているのは原田憲二郎と島軒満の論考である(原田・島軒1996)。両氏はこれまでの採集瓦に加え近年採集された瓦、さらに自身で採集した瓦を紹介し横井廃寺で用いられた軒瓦のほぼ全容をあきらかにした。軒瓦の年代観から横井廃寺の創建は7世紀前半に始まり、伽藍のほぼ全体が整ったのは7世紀後半だという。



下図：奈良市地図情報公開サイト地形図

図2 横井廃寺の立地

横井廃寺の立地についてみてみよう。寺の南側には地藏院川が東の春日山系から西に向かって流れている。塔や金堂の立地する平坦面から南は急斜面であり、平坦面と川の間に道を設けることは無理である。現在横井廃寺に至るには北側斜面沿いの道路を通して塔跡に辿り着くが、これはこれは現代に設けられた道路である。おそらく横井廃寺に至る古代の道は地藏院川の南側に展開していた平地の中を走っており、その道から北上し川を渡り塔もしくは金堂の全面に出たはずである。石田茂作が当寺を東向きの四天王寺式伽藍配置と推定したのは、現代における寺への道程から判断したものであり、本来の道程が地藏院川南の古道であることを考えれば、寺は北面する法隆寺式伽藍配置である。そして寺の北側は急傾斜の山地である。以上のことから横井廃寺も寺域の南限を川で区切り、寺域への道程は川を渡る必要があること、かつ寺域の北限は山地形で区切られていたことがわかる。

（3）崇福寺（図3）

崇福寺は天津から京都盆地へ抜ける比叡山系の山中越えの途中にある。寺は北から北尾根・中尾根・南尾根と呼ばれる三つの尾根上に堂舎が築かれている。崇福寺の創建は『扶桑略記』に天智7年と伝えられるが、内容が伝記的であることから史実とはいえない。また、崇福寺は万葉集に「志賀山寺」（『万葉集』0115）、『続日本紀』に「志我山寺」（大宝元年八月四日条）、「紫郷山寺」（天平元年八月五日条）と記されており、当時が昔から山寺と呼ばれていたことがわかる。寺ではこれまで昭和3年と13年に発掘調査がおこなわれており、飛鳥時代から平安時代を中心とする瓦・口仏をはじめ塔心礎中から舍利容器などが出土している（肥後1929・1931、柴田1941）。この調査後、有名な崇福寺・梵釈寺論争がおこり、現在では上記の北尾根と中尾根が崇福寺、南尾根が桓武天皇発願の梵釈寺であることが決定的となり論争は決着した（梅原1946、福山1946など）。中尾根は崇福寺の金堂と塔に、北尾根は残存字名から弥勒堂にあてられており、本稿では中尾根と北尾根の立地を検討対象とする。

まずは出土瓦からみた崇福寺の建立年代についておさえておきたい。崇福寺からは川原寺と同範の軒丸瓦（601A）が出土しており、この瓦当範は川原寺→高麗寺→南滋賀廃寺・崇福寺へと移動したことがわかっている（金子1983）。崇福寺から601Aが出土する事実は、『扶桑略記』の天智勅願記事と関連付けて解釈されがちである。しかし高麗寺と南滋賀廃寺の601Aを調査した梶原義実によれば、川原寺から範を受け継いだ高麗寺では、その出土量から601Aが主要瓦で、長期間にわたる生産が終了してから南滋賀廃寺もしくは大津廃寺の瓦工房に移動したという（梶原2002）。すなわち、601Aの瓦当範が近江に移るのは川原寺の建立直後ではなく、その間に高麗寺の造営期間を考慮する必要がある。さらに崇福寺にもたらされた601Aは、南滋賀廃寺もしくは大津廃寺所要瓦の流用品である可能性が高いという。また最近では601Aの高麗寺における生産期間を加味したうえで、崇福寺の創建を天武朝にまで下る新尺雅弘の見解も

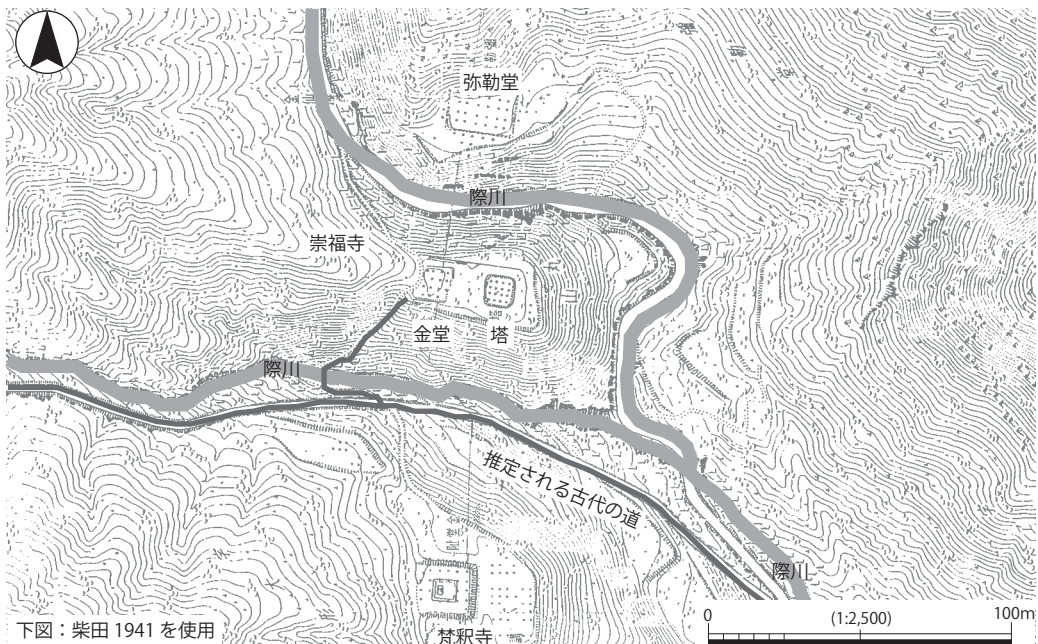


図3 崇福寺の立地

ある（新尺 2021）。山林寺院の創建瓦がごく少量であることは他の事例（比蘇寺など）でもみられ、これは創建当初の堂舎が小規模であったことをあらわすのだろう。また梶原説を援用すると崇福寺と大津廃寺もしくは南滋賀廃寺は、山寺と平地寺院の関係を推定することができ、必然的に崇福寺に 601A がもたらされたのは、いずれかの寺院の造営が一段落してからといえる。崇福寺の創建時期を天武朝と捉えるのは理にかなった解釈といえる。

崇福寺の中心伽藍である中尾根の南面には、際川の支流が西の比叡山系から東の琵琶湖に向かって流れている。中尾根の南斜面は極めて急傾斜で、際川支流の北岸に道を築くことは到底無理である。なお中尾根は北・西斜面も急傾斜で、これだけの急傾斜にも関わらず尾根が存続しているのは、寺域のほぼ全域が岩盤地質であるためで、この地質条件も寺が選地された理由の一つと考えられる。寺への道程に話を戻すと、平地から崇福寺へと向かう道は、比較的傾斜の緩やかな際川の南岸に築かれたと考えられる。南尾根の北斜面に梵釈寺に付属するとみられる平坦地が確認できるのも、際川の南岸が人工による造成可能区域であったことを示している。このことから、崇福寺への道程は際川南岸の道を通り、金堂南西の緩斜面（現在の砂防ダム手前）で川を渡り金堂へと上がったとみられる。また中尾根と北尾根の間には際川の本流が流れており、中尾根の金堂・塔区域と北尾根の弥勒堂区域は全く別の宗教空間のようである。しかし、大きな視点でみれば北尾根の背後に広がる山系は中尾根よりも遙かに高い。このように、崇福寺においても寺域の南限を区切るのは東西方向の川で、北限は急峻な山により区切られていた

空間構成を読み取ることができる。

（４）山村廃寺（図４）

山村廃寺は岸熊吉による調査がおこなわれ、南北正方位より西に傾く主軸をとる金堂と八角円堂、塔が検出されている（岸 1928）。ただし八角円堂と塔は礎石が残存しておらず盗掘孔による削平が著しいため規模や主軸の向きは不明である。なお塔について近江俊秀は、岸による調査時に出土した石製九輪が基壇の上に直に乗っていた構造、すなわち石塔と推測している（近江 2004）。岸の調査以降は保井芳太郎による採集瓦の紹介（保井 1932）がある程度で、山村廃寺そのものの調査はされていない。

山村廃寺の軒瓦は法隆寺の忍冬唐草文軒平瓦との関連で扱われることが多いが、当寺の軒瓦について専論している研究としては田坂佳子（田坂 1997）と近江俊秀（近江 2004）の論考があげられる。田坂は軒丸瓦の文様構成と軒平側の製作技法から、近江は軒丸瓦の文様の祖型が奥山久米寺所用鬼板にみられることから、両者とも山村廃寺式軒瓦の年代観を 7 世紀末から 8 世紀初頭においている。必然的に山村廃寺式の創建時期もこの時期になる。

図４は現地地形と周辺の等高線情報から復元した周辺の河道である。周辺は春日山麓からほぼ真西に向かって主たる谷筋が入り、そこに大川が流れているが、山村廃寺の周辺で北からの谷筋と南からの谷筋がそこに合流する。山村廃寺の西側には北から南に向けて傾斜する谷筋があり、そこに小河川（大川の支流）が流れ、寺の南側で大川と合流する。山村廃寺の東側には溜め池（泥池）があるが、この池は上記の大川の支流を堰き止めてできたものである。山村廃寺西側の谷筋は、周辺のゴルフ場開発と最近の太陽光パネル設置により大きく旧地形が改変され、古代の地形はあまり残っていない。寺に至る古道は現在の大川北岸を走っていたと考えられるが、周辺には民地が広がるため詳細な踏査はかなわなかった。しかし少なくとも古道が大川の本流と支流の間を走っていたことは確かで、寺域に入るためには大川の支流を渡らなければいけない。いっぽう寺の背後、山村廃寺の場合は真北ではなく北より西にふれるが、そこには急峻な山並みがある。山村廃寺は地形的制約があったため、南北正方位をとらなかったが、これまで説いてきた川が寺域前面の境界を、山が寺域背後の境界を示すことは共通する。

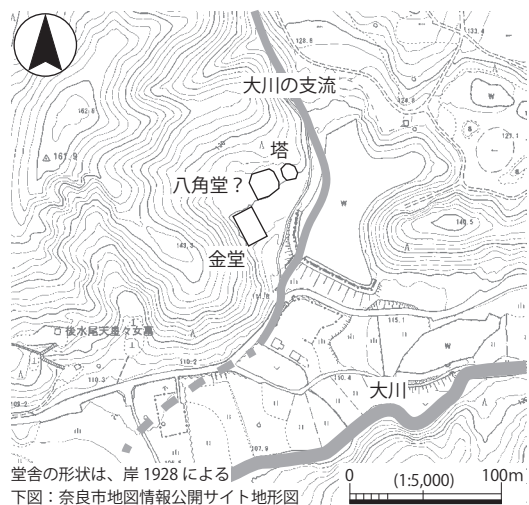


図４ 山村廃寺の立地

(5) 古市廃寺 (図5)

古市廃寺が最初に調査されたのは昭和35年である(中村1960)。調査では塔と金堂が検出され、北向きの四天王寺式の伽藍配置で復元されている。この調査に先立つ測量作業時に、単弁で弁端に珠紋を持つ飛鳥時代の軒丸瓦が採集されており、以降古市廃寺は飛鳥時代の創建だとされてきた。その後、当寺では平成元年に塔の南西側で調査がおこなわれ、奈良時代の大量の瓦が出土し、同時期の掘立柱建物群が検出されている。中井公はこの調査で出土した軒瓦を整理し、その主体となる創建瓦を平城宮式軒丸瓦6304Gと同軒平瓦6668Bであるとした(中井1991)。論中において中井は、古市廃寺の創建時期について直接言及はしていないが、筆者が文面から読み取る限り、その創建は平城宮瓦編年Ⅱ期以降(天平元年以降)にとらえられる。なお昭和35年の調査時に採集された飛鳥時代の軒丸瓦であるが、この瓦の採集者に直接聞き取り調査をおこなった原田憲二郎によれば、実は採集地点は古市廃寺ではなく横井廃寺であったという(原田・島軒1996)。このことから、古市廃寺の創建時期は飛鳥時代ではなく、上述の奈良時代中頃となる。

古市廃寺の周辺は南東にため池(平尾池)が築かれていること、古市小学校東側の市街化により水路が大きく付け替えられていることから、原地形から古代の旧地形を直接判断することは難しい。周辺を踏査したうえで、戦後の地図や奈良市の調査概報所載の等高線情報、現在の等高線情報を合わせて考えると、寺域の南側には図5のように河川が流れていたと推測される。古市廃寺周辺の地形は、春日山麓末端の北東から南西の平野部に向けて谷筋が複数入り込んでいるのが特徴である。古市廃寺の南側にも同様の谷筋がみられ、谷筋は現在の平尾池の西端で推定南大門の真南を走る谷筋(地藏院川の支流①)と、さらにその南側の谷筋(地藏院川の支流②)に分かれる。現段階での比高差から考えて、急傾斜を呈する支流②の南側に寺域へ

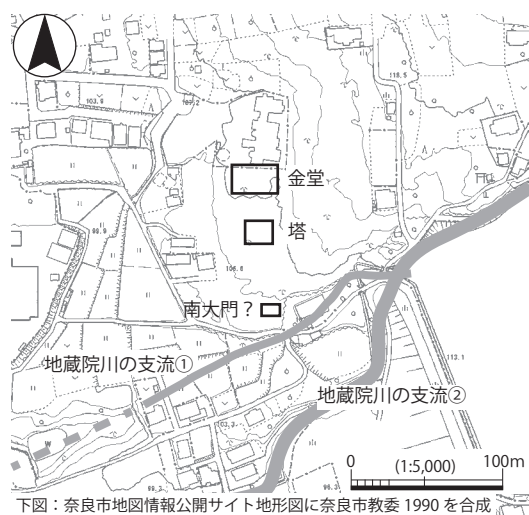


図5 古市廃寺の立地

と向かう道があったとは考えにくく、南大門へ向かう道は支流①と②の間に形成された段丘上にあったものと考えられる(実際現在でも道がある)。金堂の北側は横井廃寺ほどの山並みが広がっているわけではないが、北東方向に向けてなだらかに高くなる地形を呈している。

(6) 石山寺 (図6)

石山寺は福山敏男の正倉院文書を用いた研究により、天平宝字5～6年(761～762)の間に檜皮葺きの堂舎から、瓦葺き

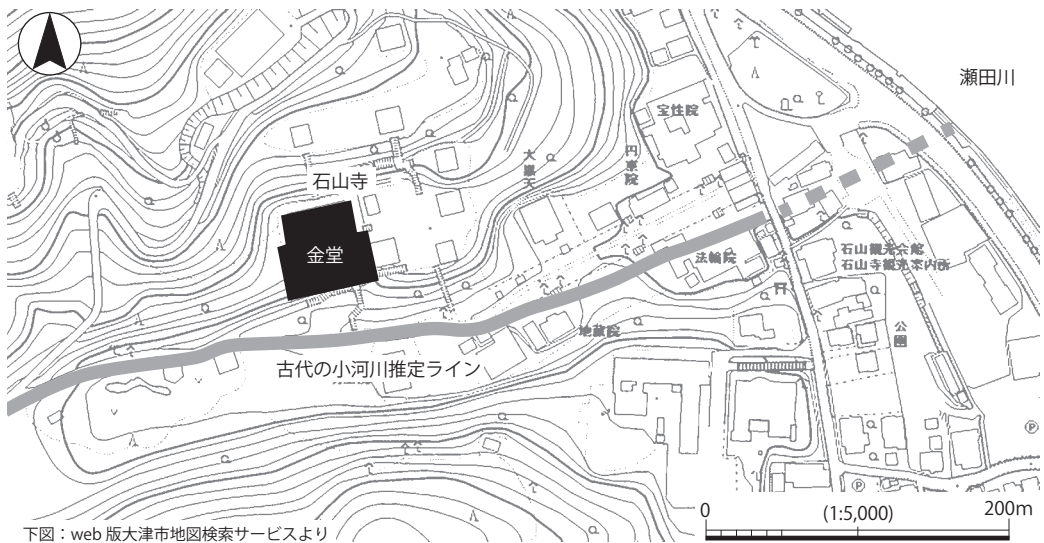


図6 石山寺の立地

の堂舎に建て変えられたことがあきらかになっている（福山 1943）。造営を担当したのは造東大寺司配下の造石山院所で、同所の実質的な造営主導者は良弁である。しかし、石山寺では7世紀中頃と考えられる単弁八弁蓮華文軒丸瓦が伝わることから、創建が天智朝に遡る可能性も考えられる（大津市歴史博物館 2017）。現在の石山寺正堂（本堂）は承暦2年（1078）の火災で焼失したものを、永長元年（1096）に再建したとされるが、櫻井敏雄によるとその再建規模は天平宝字年間（749-758）の良弁によるものをそのまま採用したという（櫻井 1986）。そのため、現在の正堂が天平宝字年間に建立された金堂にあたると思われる。

まず現地で明確にわかることは、石山寺の立地が岩盤地質の上に成り立っていることであり、正堂（金堂）も岩盤を平坦化した上に建てられていることである。このことは、先述した崇福寺と共通する。この岩盤地質は東側の山地から西側の瀬田川に向かって派生する丘陵全域にわたるとみられ、金堂の北側がその丘陵の稜線にあたる。このことから、石山寺の正堂（金堂）は、岩盤地質の丘陵の南斜面に築かれていることがわかる。つぎに、金堂に至る道程であるが、現在の石山寺の参道は瀬田川沿いに西面する山門を通して西行し、金堂南側の階段をあがる道程を辿る。参道の北には水路があるが、現地形を見る限り参道のほうが水路よりも低く、おそらく創建時には東から瀬田川に流れる小河川が現参道が通る低地に流れていたと推測される。創建時における金堂への古道が、現参道の南にあったか否かは原地形からは判断できないが、少なくとも金堂の南側に東西方向の河川が東の瀬田川に向けて流れていたこと、さらに金堂の北側に急峻な丘陵の稜線があったことは確実視できる。

3. 山林寺院の立地に関する一類型

前章において大和と近江地方の山林寺院の立地について検討したわけだが、それらには共通する地理的条件があることがわかった。その条件について箇条書きにすると以下になる。

- ① いずれの寺院も寺域の南限が東西方向に流れる川となっていること。
- ② 川の南側には道があり、その道を辿って北上し寺域に入ること。
- ③ 寺域の北限は急峻な山によって限られていること。以上の3点である。

本稿では紙幅の関係上取り上げなかったが、春日山系の麓に限って類例を求めるだけでも、他に岩淵寺や東大寺山堺四至図中の大伴寺など複数の寺院が同じ立地にあることがわかる。

6世紀末に飛鳥寺が建立されて以降、飛鳥・奈良時代の寺院造営にはいくつかの画期があった。その画期の要因は日本国内で醸成されたものではなく、外来からの情報、すなわち大陸から来朝した僧尼がもたらした經典類を中心とする仏教信仰の流入によるものと考えてよい。まず仏教が伝来した初期は百済からの渡来僧により寺院造営に関するすべての情報がもたらされた。その後660年頃に唐から帰朝した道昭が持ち帰った大乘經典の影響、養老2年に帰朝した道慈による三論を主とした經典類の影響、さらに天平7年に帰朝した玄昉による初期密教經典の影響、これらを画期として寺院造営とその経営のあり方、すなわち伽藍配置やそこでおこなわれる法会、それに関わり書写・転読される經典類が大きく変化したことはすでにあまたの先学が説くとおりである。しかし筆者がここで主張したいのは、以上のような寺院造営における画期があるにもかかわらず、例えば7世紀前半に建立された横井廃寺、7世紀後半に建立された崇福寺、8世紀中頃に建立された古市廃寺などの例を見る限り、時代を通じて多くの山林寺院で同じ地理的条件が選ばれているということである。

上原真人は前章で取り上げた論考の中で「山寺は、必ずしも自然立地で定義できるものではなく」山寺を規定する最大の条件は俗地との隔絶性であり、「自然立地上の条件は、その人文環境上の条件から派生した二義的な要素」とであると論じている（上原1986）。しかし本稿で検討した寺院は、意識的に上記三点の地理的特徴を考慮したうえで寺地を選地しており、あきらかに選択された自然地理条件をもって聖域を形成しようとする意図が見受けられる。初期の日本における山林寺院の立地は、百済における山林寺院の影響があったと考えられるが、はたしてこの段階で伝えられた立地条件が百済仏教に特有のもので、かつそれが百年以上も継承されたかといえそうとは考えられない。となれば、日本において各時代に上記のような画期があったにもかかわらず、いくつもの山林寺院がさきに説いたような同じ立地条件で選地されたのは、共時的かつ汎アジア的な仏教教義上の背景が根底にあるとしか考えられない。

例えば雲崗石窟は北魏の文成帝の時代に開削された石窟寺院であるが、当寺の都である平城

から西北に離れた丘陵地にあり、その南面に十里河が流れ、その北面は断崖絶壁である。また龍門石窟は北魏洛陽城の南西、隋唐洛陽城の南の丘陵地に開削された石窟寺院であるが、方位が90度異なるものの、石窟の全面に伊河が流れその後面は断崖絶壁である。敦煌莫高窟も龍門石窟同様方位が90度触れるが、石窟の全面に河、後面に断崖絶壁をひかえる。同様の立地は7世紀の高昌国の都である高昌故城から北に離れた山地に位置するベゼクリク千仏洞、西のトユク石窟でもみられる。さらに西では、7世紀代の亀茲国の都である亀茲城北郊の山地に位置するキジル石窟、クムトラ石窟、タイタイル石窟も同じ地理的条件にある。

アフガニスタン以西の仏教寺院については筆者は未踏査であるため、詳細な地理情報を持ち合わせていないが、調査報告書などを参考に同様の例をあげるとバーミヤン石窟、アジャンター石窟、エローラ石窟など枚挙に暇がない。これはインドを初源とする仏教寺院に共通の地理的要件と考えられ、日本ではそれが山林寺院に具現化されたと考えたい。そもそも、飛鳥寺をはじめとする、藤原京内・平城京内の寺院、地方の里の寺院といった平地寺院はいずれも俗界に営まれたもので、その立地に聖性は皆無である。本来寺院が持つべき聖性を考えたとき、俗界の中で聖性を持つ空間を作り出すことには無理がある。そのため、日本では地理的条件を熟慮した山林寺院にその聖性を求めたといえ、その結果が今回検証した寺院の立地にあらわれたと考えたい。その背景にある汎アジア的な教義とは何かというと、筆者は『具舎論』などに説かれる仏教的世界観であったと考えるが、この問題については続稿で述べたい。

（未完）

引用・参考文献

- 石田茂作 1936「横井廃寺」『飛鳥時代寺院址の研究』聖徳太子奉讃会、奈良：pp. 367-376
- 石田茂作 1938「伽藍式より見た天台宗と真言宗」『斎藤先生古稀祝賀記念論文集』、東京：pp. 105-118
- 岩井孝次 1937『古瓦集英』岩井珍品屋、奈良
- 上田三平 1928「毛原廃寺址」『奈良県における指定史蹟』第2冊 内務省、東京：pp. 27-28
- 上原真人 1986「仏教」『岩波講座日本考古学4 集落と祭祀』岩波書店、東京：pp. 308-366
- 上原真人 2002「古代の平地寺院と山林寺院」『仏教藝術』265号 毎日新聞社、東京：pp. 13-25
- 梅原末治 1946「崇福寺論争とその経緯」『史迹と美術』第16-7 173号 史迹美術同攷会、京都：pp. 191-206
- 近江昌司 1988「古代山岳寺院小考」『考古学ジャーナル』No. 426 ニュー・サイエンス社、東京：pp. 5-8
- 近江俊秀 2004「山村廃寺式軒瓦の分布とその意味—7世紀末における造瓦体制の一側面—」『研究紀要』第8集 由良古文化研究会、奈良：pp. 35-63
- 大西貴夫 2008「古代の山寺の多様性について—大和国の山寺集成—」『王権と武器と信仰』同成社、

- 東京：pp. 926-936
- 大津市歴史博物館 2017『大津の都と白鳳寺院』大津京遷都 1350 年記念第 74 回企画展図録、滋賀
- 奥村茂輝 2011「法華寺の成立過程」『南都佛教』第 96 号 南都佛教研究会、奈良：pp. 88-123
- 奥村茂輝・合田幸美 2023「摂津金龍寺における寺域と結界域」『大阪文化財研究』第 57 号 公益財
団法人大阪府文化財センター、大阪：pp. 15-28
- 梶原義実 2002「最古の官営山寺・崇福寺—その造営と維持—」『佛教藝術』265 号 毎日新聞社、東京：
pp. 96-113
- 金子裕之 1983「軒瓦製作技法に関する二、三の問題」『文化財論叢』同朋舎、京都：pp. 269-285
- 岸 熊吉 1928『奈良県史蹟名勝天然記念物調査会第拾回報告』奈良縣、奈良
- 久保智康 2001「山林寺院の空間構成」『古代』第 110 号 早稲田大学考古学会、東京：pp. 269-286
- 斎藤 忠 1997「山林寺院の研究」『斎藤忠著作選集』第 5 巻 雄山閣、東京：pp. 67-104
- 櫻井敏雄 1986「山岳宗教建築の礼拝空間 その成立と展開—山岳宗教の建築（上）—」『佛教藝術』
168 号 毎日新聞社、東京：pp. 49-79
- 柴田 実 1941「大津京趾 下 崇福寺趾」『滋賀県史蹟調査報告』第 10 冊、滋賀：pp. 1-211
- 新尺雅弘 2021「近江大津宮周辺における瓦生産の実態」『日本考古学』第 52 号 日本考古学協会、
東京：pp. 37-57
- 須田 勉 2002「国分寺と山林寺院・村落寺院」『国史館史学』国史館大学日本史学会、東京：pp. 1-
31
- 関野 貞 1902「大和国毛原伽藍遺跡」『考古界』第 1 編第 9 号 考古学会、東京：pp. 1-9
- 藁田香融 1957「古代仏教における山林修行とその意義—特に自然智宗をめぐる—」『南都仏教』
第 4 号 南都仏教研究会・東大寺、奈良：pp. 45-60
- 高橋健自 1906「中臣氏の氏寺およびその遺址」『歴史地理』8-1 日本歴史地理学会、東京：
pp. 8-23
- 田坂佳子 1997「山辺の道の古代院研究」『古事』天理大学考古学研究室、奈良：pp. 36-49
- 千葉徳爾 1993「山の生活」『岩波講座日本通史』第 1 巻 岩波書店、東京：pp. 153-182
- 中井 公 1991「寺の瓦と役所の瓦」『季刊考古学』第 34 号 雄山閣、東京：pp. 71-76
- 中村春壽 1960「古市廃寺の調査」『奈良県観光』43 奈良県観光新聞社、奈良：p. 2
- 西崎辰之助 1918「毛原廃寺趾」『奈良県史蹟勝地調査会報告書』第 5 回 奈良県、奈良
- 原田憲二郎・島軒 満 1996「横井廃寺の軒瓦について」『奈良市埋蔵文化財センター紀要』奈良市教
育委員会、奈良：pp. 1-30
- 肥後和男 1929「大津京趾の研究」『滋賀県史蹟調査報告』第 2 冊、滋賀：pp. 2-164
- 肥後和男 1931「大津京趾の研究—補遺—」『滋賀県史蹟調査報告』第 3 冊、滋賀：pp. 9-27
- 福山敏男 1943「奈良時代における石山寺の造営」『日本建築史の研究』桑名文星堂、京都：pp. 309-
436
- 福山敏男 1946「梵釈寺について」『史迹と美術』第 16-1 167 号 史迹美術同攷会、京都：pp. 1-

- 福山敏男 1948「中臣寺」『奈良朝寺院の研究』高桐書院、京都：pp. 127-137
- 松田真一・近江俊秀 1991「毛原廃寺の研究—基礎資料の集成と若干の考察—」樞原考古学研究所紀要『考古学論攷』第15冊 奈良県立樞原考古学研究所、奈良：pp. 51-133
- 森川桜男・山田 猛 1980「伊賀国分僧寺出土瓦とその周辺」『古代研究』21 元興寺文化財研究所、奈良：pp. 33-46
- 山添村教育委員会・奈良大学文学部文化財学科 2020『毛原廃寺跡 第2次発掘調査報告書』、奈良
- 山添村教育委員会・奈良県立樞原考古学研究所 2024『毛原廃寺跡Ⅱ』、奈良
- 保井芳太郎 1928『大和古瓦図録』大和史学会、奈良
- 保井芳太郎 1932『大和上代寺院誌』大和史学会、奈良
- 和歌森太郎 1975「山岳信仰の起源と歴史的展開」『山岳宗教の成立と展開』名著出版、東京：pp. 13-43

挿図出典

挿図はすべて筆者が作成した。地図の下図は図中に記してある。